特集・子どもの文学この一年

★総論

「コロナ」の波が押し寄せる中で
――子どもを取り巻く環境と子どもの本の現状

土居　安子

1．子どもの本を取り巻く状況

二〇二〇年は、新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威をふるい、オンラインの加速化につながり、子どもたちの物語享受や情報獲得やコミュニケーションに大きな影響を及ぼした。休校中にネット上でアニメーションを視聴したり、ゲーム漬けになったり、YouTubeの視聴が増えたり、SNS上で友だちとつながったりする現象が見られた。

一人一台端末を持って学習する「GIGAスクール構想」（文部科学省）が進められ、二〇一九年からデジタル教科書が使われ始め、二〇二〇年は、期間限定で、多くのマンガや『週刊少年ジャンプ』などのマンガ雑誌に加えて「電子図書館まなびライブラリー」（ベネッセコーポレーション）や、KADOKAWAつばさ文庫、『小学館　学習まんが　少年少女日本の歴史』全二四巻などの電子書籍が無料公開されてよく読まれた。また、公共図書館の中でも電子書籍の導入が少しずつ検討されていると聞く。

そんな中で、「紙の本」というメディアをどう考えるべきかという課題は待ったなしの状況である。その答えは、紙の本だけを神格化すべきであるということではまったくない。本という文化を継承するために、子どもたちが他のメディアと同じように楽しむ意義があると思えるような本をいかにして出版していくかということであり、他のメディアでは得られない本のおもしろさとは何かを考えるということにつながる。その根幹に「ことば」があり、物語では、構造やレトリック、描写などが楽しめることが挙げら